

悪 霊 第十部・取り憑かれし者たち

悪
霊
第十部・取り憑かれし者たち

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。孤兒院建設に奔走する
猪俣佐和子……………元党員。上海で工作運動に従事。活動名・梅梅ハナハナ
飯島貴代美……………元党中央委員。上海で工作運動に従事。活動名・芳芳フアンフアン
金沢文子……………貧民窟に暮らす少女
佳代……………貧しい農家の娘。安藤邸の女中
韓愛子ハンエジャ……………元玉ノ井の娼婦。日本での源氏名はまち子
李麗姫イヨヒ……………元女性抗日パルチザン。満枝の協力者
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
初代……………津島の妻。元弘前の芸者
ミス・スメドレー……………上海在住のアメリカ人ジャーナリスト。
佐藤碧子……………菊池の秘書
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に
宮様……………陸軍大尉。参謀本部作戦課付
安藤澄……………東京帝国大学国史科助教授。安藤浄海の息子
北一輝……………国家主義者
馬海松……………『モダン日本』編集長
菊池寛……………文藝春秋社社長
津島修治……………作家志望の青年

- 山根教授……………弘前高校教授。孤兒院研究の第一人者
倉石……………県会議員
岡沢子爵の令息……………黒襟隊長
思芳……………支那人美少年
仁科中佐……………上海派遣軍将校
倉持英輔……………南京日本総領事館書記生

【時・場所】

昭和八年（一九三三）十二月～昭和九年六月。東京、弘前、北海道H市、上海、南京。

冬が去って梅の花がほころびはじめ、各所にウグイスの声が響くようになった三月。

中野区桃園町四十番地。築山の裾に池を穿った広庭のある一輝こと北輝次郎の邸を訪ねるのは、小沼健吾にとつて二度目だった。

「あなたの志はよく分かった」

うつむいて小沼の話聞いていた北は顔をあげた。向けられた眼差し向きがわずかに違っている。北は少年時代、眼病を患って右眼を失明し、義眼を入れていた。

「それで、具体的にはどうせよと言うのかね」

詰め襟の支那服に、きちんと髪を整え、きれいにたくわえた髭をひねりながら、魔王と呼ばれる五十一歳の国家主義者は問うた。

「救国埼玉青年挺身隊でしたか……」

小沼は口を開いた。

「もうそろそろ、公判ですかね」

北は、端正な面差しを微塵も動かさなかったが、左の眼の瞬きをやや止めたところに、僅かに内心の動揺が見てとれた。

昨年、すなわち昭和八年十一月、二十代前半の右翼団員七名が、その月に川越市で開催される予定だった政友会関東大会に出席する政友会総裁・鈴木喜三郎暗殺を企てたという理由で逮捕

された。救国埼玉青年挺身隊と名乗るその団体は、日本刀や猟銃を用意し、暗殺目標として総理大臣の齋藤実、元老の西園寺公望や牧野伸顕、民政党総裁・若槻礼次郎といった政界の重鎮たちを、暗殺リストに載せていた。

「彼らは先生の『日本改造法案大綱』を手本に、行動を始めようとしていたとか」

北の唇がかすかに歪んだ。

『日本改造法案大綱』は、十一年前の大正十二年に改造社から刊行された。軍隊が蜂起して戒嚴令を布き、内閣や政党を廃止して、天皇親政による国家改造を断行せよと訴え、多大な反響を呼んだ。法案の形で列挙された数々の国家改造策——言論の自由や基本的人権の尊重、華族制度の廃止、普通選挙制の実施、財閥解体、皇室財産の削減など——のなかでも、個人の私有財産を百万円に、私有地を十萬円に、私企業の資産を一千万円までに制限し、余剰分は国庫に没収し、主要産業は国営化すべしという過激な主張は、貧富の格差解消を訴える右翼青年や若い軍人に強いインパクトを与えたのだった。

実際の北一輝は腕自慢のあらくれ者を集めて書生とし、拳銃を与えて自宅の庭で射撃の練習をさせ、彼らを駆使して労働争議に介入したり、資産家や企業を恐喝して大金を巻き上げる荒っぽい男であった。どこまで本気で国家改造を夢見ているのか分からないところがあり、それが「魔王」とも呼ばれるゆえんであった。

黙して応ぜぬ北の前に、小沼は続けた。

「愚かなことです。要人を何人暗殺しようが、世の中は変わらない。犬養総理を暗殺すれば、齋藤実が代わりを務める、それだけの話です」

北の背後の仏壇から線香の匂いが漂ってきた。北は、日蓮宗の熱心な信者として知られていた。「国家改造を成功させるために必要なのは、恐怖と不安です」

眠たげな左の臉がひくと動いた。小沼は懐から、紐で閉じたガリ版刷りの小冊子を取り出して、卓の上に置き、北の目の前にすつと動かした。

「これは、支那の革命家が著した農民暴動の報告書です」

毛沢東の「湖南省農民運動視察報告」であった。七年前の一九二七年、彼の指導の下に大規模に展開された農民暴動のレポートである。

「土豪劣紳のうち、殊更富裕な者は、銃殺に処された」「各地で盛んに行われているのは、三角の帽子を冠らせ、村じゅうを引き回すことである。……一度でも、このような制裁を受けた者は、廢人同然となり、二度と立ち上がれなくなるまでうちのめされる」「土豪は、いつ、あの制裁を受けることになるか分からず、日夜苦悶と不安の日々を過ごすのだ」「何もかもが常軌を逸している。村は恐怖に包まれる」「農村は、このような恐怖を作り出さねばならない」……。

「これは、いい一節だね」

興味深げにページをめくっていた北は、広げた小冊子を卓に置き、ある箇所を指で指した。

……革命とは、客を饗応することでも、文章を書くことでも、絵を描くことでも、刺繍をすることでもない。左様な、上品で、優雅で、穏健で、慎ましいものではない。革命は暴動である。「そうです」

小沼は言った。

「必要なのは恐怖と不安。日本国中を恐怖と不安で包んだとき、国家改造は成就する。いな、恐

怖と不安なしに、国家改造は成し遂げられません」

「それで、あんた」

北は、同じ言葉を繰り返した。

「具体的にはどうせよと言うのかね」

「騒ぎを起こしてほしいのです」

「騒ぎ？」

「はい、新聞沙汰になるような騒ぎをです」

小沼は言った。騒ぎが百回起こっても、新聞で報道されなければなかったと同じです。言葉をかえれば、ただ一度だけの騒ぎでも、新聞記事になれば人心を不安に陥れることができます。

「ここ数ヶ月、華族や資産家の子弟が、月に一度、三〜四人ずつ何者かに殺害されています」

「ふむ」

「昨年の秋以来、すでに二十余人が聞くもおぞましいやり口で命を落とし、犯人はいまだ捕まっています」

支配階級はいま、不安に怯えている。そこに、労働者が騒ぎを起こせば、なおさら浮き足立つ。支配階級が揺らげば、国民はより強い力を持つ指導者を待望するようになる、そこで……。

「軍が立ち上がる、というわけかね？」

北が口を挟んだ。小沼は頷いた。北は続けた。

「鶴見の騒擾のような事件を、いくつか起こせばよいのだな」

九年前の大正十四年、横浜市鶴見区で計画された発電所建設の入札をめぐる土木業者の対立が

大抗争に発展、二千を越す土工や与太者が激突し、多数の死傷者を出す市街戦となった。

「できれば、支那人や朝鮮人の労働者が混じっているとなお、よろしいです」

小沼は、頬を歪めて笑った。

「支配階級のみならず、一般国民も、彼らの暴動を恐れていることは、関東大震災の後の虐殺騒ぎで明らかになったのですから」

「とはいえ、あんた、労働者は理屈では動かんよ」

北は澄まして言った。小沼は頷き、鞆から風呂敷に包んだ四角いものを取り出して卓上に置いた。北は手を伸ばして風呂敷包みを少し開け、なかみを確かめてから、はじめて笑みを見せた。

北一輝の家を辞した小沼は、いったん自宅に戻り、背広を脱いで貧しい労働者の服に着替え、市谷台下の貧民街に出かけようと玄関を出た時、あ、と声をあげて足を止めた。

金沢文子が、大きな鞆を両手に提げて立っていた。紺色の膝丈スカートに白いブラウス、グレイのカーディガンをひっかけた十七歳の文子は、貧民窟を徘徊する不良少女ではなく、中産家庭の子女の、清楚なよそ行き姿に見えた。

「お久しぶり」

ショートボブに整えた髪を右手で撫でつけながら、文子は微笑んだ。このところ小沼は、かつてのつてを頼りに国家主義者たちを訪ね歩いて、伊集院満枝から提供された資金をばらまき、社会不安を引き起こす工作に携わっていた。北一輝を口説き落として一段落したので、久しぶりに文子に会おうとしたら、彼女のほうからやってきたのである。

「珍しいな」

小沼は満面の笑みを浮かべ、文子に歩み寄った。

「あがつていくか？」

「やめとく」

文子は笑みを保ったまま一歩、後ろにさがって言った。

「どうせ、やる気だろ？ 一回でも肌を合わせて離れたくなくなっちゃったら、さぞ辛いだろうからさ」

その言葉の意味を掴みかね、訝しげな面差しになった小沼に、文子は続けた。

「あたい、これから奈良に行くんだ」

「奈良？」

「ああ、当分帰ってこないと思うよ」

「水平社？」

「うん、知ってるだろ」

小沼の借家からほど近い盛り場のカフェで、テーブルを挟んで小沼と向き合った文子は、額を寄せるようにして声をひそめた。

大正十一年、奈良県葛城地方の被差別地域に住む青年たちが差別撤廃を謳って全国水平社を立ち上げた。被差別地域の人々が差別的待遇を受けると、大勢で押しかけて「糾弾」することを主たる活動としている。一時期は社会主義グループが実権を握ったため、官憲の弾圧を招いて沈滞

したが、また勢いを盛り返しているという。

「ほら、去年の夏、麗姫たちが帝大の安藤って先生と一緒に奈良に籠もってただろ？ そのとき、水平社の一派と知り合いになったらしいんだ」

安藤たちがその一帯を調査している時、珍しく女性が宮司を務める由緒正しい神社の存在を知り、その女性宮司を訪ねて話を聞いた。彼女によると、神社の近くに神武天皇が即位した地とされる掖上村柏原という地があり、水平社を結成したのは、その地の青年たちであるというのだ。

東京に戻ってきた麗姫や愛子からその話を聞いた文子は、水平社に興味を抱いた。

「だから、麗姫に頼んで、その女性宮司さんに紹介状を書いてもらったんだよ」
どんなふう「糾弾」するのかいろいろ聞いたけど、面白そうだなって思ってた。そう言っ
てコーヒーに口をつける文子に、小沼は問うた。

「水平社の運動に参加するの？」

「まだ決めてないけど、どんなやり方なのか見ておくのもいいかなあって」

「でも、あれは誰でも参加できるわけじゃないだろう。そもそも……」

「ああ、それなら大丈夫」

口ごもる小沼に、文子は、コーヒーを口に含んで微笑んだ。

「あたいはえたの子だもん」

そうだったのか？ 小沼は眼を見開いた。文子は頷いて言った。そうだよ、だから、朝鮮人も仲良くできるんじゃないか。

「別に隠してたわけじゃないけどね。小沼さんは、あたいがそんな生まれだからって、つきあう

のをやめるような人じゃないと思うしさ」

「それで……」

小沼は問うた。満枝には話したのか？

「後で手紙を書いて送るつもり」

文子は首を振って俯いた。

「正直言うと、最近なんだか気に入らなくて」

文子は窓の外の通りを見つめて言った。あたいは指図されるの嫌いなんだよ。

小沼は、朝鮮人集落で女たちが二人の華族青年を去勢した夜に浮かべていた不機嫌な面差しを思い出した。なんか、虫が好かねえ。処刑の風景を見つめながら、文子はそう呟いていたのだ。

「どうもね、何やっても、あの伊集院って女の掌の上で遊ばれているような気がしてならなくてさ、あたいたい、そういうの性に合わないから」

「それで、奈良へ？」

「ああ」

文子は、右手の人さし指を伸ばして、小沼の頬を軽く叩いた。

「ひよっとしたら、奈良で『湖南省農民運動』始めるかもしれないぜ」

えたの女たちを率いて、人を差別するような奴らのきんたまを片っ端から蹴り上げてやったりさ。そう言っただけなら笑い、つまんなけりやすぐ帰ってくるかもしれないけど。そう付け加えてコーヒーを飲み干して立ち上がった。そろそろ行くよ。言うことはぜんぶ伝えた。これ以上一緒にいて未練を残したくないの。

「寂しくなるなあ」
立ち上がった小沼に歩み寄り、文子は手を伸ばして股間に触れた。

「こいつが、だろ？」

面差しを強張こわばらせた小沼に、文子は眼を細めて笑みを見せ、立ち上がって出口へと向かおうとした。

そのとき。

「わ！」

ドアのあたりで叫び声があがった。見ると、黒い軍服のような格好をした男が、手で鼻を押さえてかがみ込んでいる。その対面に、怯えた面差しの女給が、手で口を覆おほって震えていた。

男の背後から「どうたんですか？」「何がありやしたか？」と声があがり、どやどやと三人の男たちが店に入ってきた。

四人の男たちの闖入ちんにゅうに、店内が静まりかえった。男たちは、黒羅紗ろしやに金モールの入った詰め襟服を着ていた。ナチスの軍服のようないでたちだが、軍人でないことは、長くのばしてポマードで固めた髪からうかがえた。

……黒襟隊だ。

小沼は、顔を擧あげた。

昨今の華族子弟が次々殺害される事件が——誰が犯人かを小沼は知っている——続発したことを受け、華族子弟の一部が自警団を結成した。彼らは街の与太者よたものを雇い、ナチス親衛隊の軍服を

模した制服を買い与え、外出の際の警護をやらせていた。なかには、彼らに混じって自らも黒い制服を着込んで街を闊歩する華族子弟もいる。

「この女が、俺の顔に鞆たづをぶつけたんだ」

鼻を押さえていた男が叫うめいた。血が滴たり、制服の胸のあたりを汚している。品のよさそうな面差しから見ると、彼は華族だろう。だが、その背後の男たちの人相は、どうやら与太者のようだった。

「やい、貴様！」

一人の黒襟が、女給に詰め寄り、肩を掴んだ。

「わざとやったのか？」

「ち、違います」

女給は必死で首を振った。

「わざと、違います」

その言葉には訛なまりがあった。

「貴様、朝鮮人か！」

別の黒襟が怒鳴った。な、何事ですか？ 店長が真っ青な顔をして飛んできた。

「この方は、岡沢子爵様の御令息だ」

黒襟が怒鳴った。

「そのお方に、この朝鮮女が危害を加えた。警察に連行する」

「ま、待ってください」

店長は必死に幾度も頭を下げた。いくらでもお詫びします。警察だけはお勘弁をと繰り返す店長と並んで朝鮮人女給が涙を流すさまを見ていた文子は、小沼に「後で、追いかけてきて」と耳打ちし、黒襟たちに歩み寄り、「ねえ」と声をかけた。

不審げな黒襟たちの眼差しを笑顔で返して文子は、「ごめんなさいね。その娘はあたいの妹分なんだ」と言った。顔をあげて驚く朝鮮人女給をそっと手で制して、妹分の不始末は、姉貴のあたりが引き受けるから、ちよつと外に出ない？　ここじゃお店に面倒かけるからさ、とさつさと外へと出て行った。黒襟たちはあつげにとられて顔を見合わせていたが、好色そうな眼つきで文子を見つめていた岡沢子爵の令息が「行くぞ」と促し、ともに外に出た。

小沼は立ち上がり、店長に紙幣を渡して支払いをすませ、店を出た。外の通りを見回すと、文子は、四人の男たちを従えるようにして、路地へと入っていった。あの先には、倒産した工場の建物がそのまま残っていたはず……。そう思つて後を追つた。

黒い扉に囲まれた工場の入り口の門は、錆びて朽ち果てており、たやすく中に入ることができた。木造一階建ての工場のドアを開けると同時に、鋭い奇声が小沼の耳を打った。

埃をかぶつた機械が隅に並んだほか、がらんどろとなつた屋内の床に、一人の黒襟が倒れた。傍らに一人、別の黒襟が、両手を太ももで挟み込むようにして股間を抑えて悶絶している。いま倒れたばかりの黒襟も、同じような姿勢で呻き声をあげはじめた。

さらに奇声が轟いた。文子が、その小柄な体を跳躍させ、空中で一回転して三人目の黒襟の延髄に膝頭を叩き込んだ。黒襟は俯せに倒れた。文子はすかさず、黒襟の股間を爪先で蹴った。黒

襟は悲鳴をあげ、他の二人と同様にのたうちまわつた。

見たこともない早技だつた。わずか数秒で、文子は三人の男を倒したのだ。やや離れた隅では、壁に背中をくつつけるようにして、岡沢子爵の令息が真っ青な顔で震えている。

「見た？」

不意に文子が振り向いて、小沼に目をやった。唇の端をつり上げて笑っている。

「テッコンドーっていうんだ。朝鮮のパルチザンが使う技なんだって」

麗姫から習つたんだよ。文子はそう言いながら、岡沢子爵の令息に歩み寄つた。令息は金切り声をあげた。

「助けてくれ！」

両手で股間を蔽い、令息は涙を流しながら謝つた。

「頼む。悪かつた。いくらでも謝る。お金が要るなら、いくらでもあげる。だから……」
これだけは勘弁してください。そう言つて令息は、股間をしつかりと手で防御した。

「大丈夫、あたい、そういうの趣味じゃないから」

文子はそう言つて、令息に背を見せる形で小沼のほうに顔を向けた。小沼さんも知つてるよね。あたい、男のきんたまを蹴るのは得意だけど、潰したりはしないって。そう言う文子の背後で、令息が足下の鉄棒を拾い、振り上げた。危ない。小沼が叫ぶよりも早く、文子の体が回転した。右足を振り上げ、回し蹴りを令息の顔面に放つた。令息は鼻孔から血を噴き出しながら倒れた。八の字に足を開いて倒れた令息の股間の真上に、右の足を高くあげた文子は、そのまま振り下ろして踵を辜丸に打ち込んだ。令息はのけぞり、失神した。

「じゃ、あたい行くね」

文子は息ひとつ乱さず、小沼に歩み寄った。爪先立ちつまさきになって小沼の肩を抱き、軽く頬に唇を当てた。

「今度の生け贄にえは、あいつらにしたら？」

背後で悶絶する四人の男たちを一瞥いちげつし、文子は笑った。

翌朝、岡沢子爵の令息とその仲間三人が、鞆丸を完全に潰され、切り取られた陽物を口に含まされた無惨な死体となって発見された。